部活動報告

吹奏楽部の2年間を通じて（下）

峯岸　優介
Yusuke MINEGISHI

１．はじめに

令和元年6月20日に発行された本誌で、本校吹奏楽部の2014年～ 2016年の2年間のうちの初年度の1年間に感じたものや中期の活動を紹介したので、今回は中期の内容に触れながら後期の活動を紹介していく。また、現在の吹奏楽部の活動も同時に紹介していく。

２．2014年（平成26年）9月～ 2015年5月までの活動報告

（1）9月の文化祭から5月の定期演奏会まで

Ⅰ.試練の文化祭

① コンクール後の「試練の」文化祭

夏の天王山であるコンクール（いわゆる大会）を終え、一息つきたい頃であるが、なかなか落ち着けないのが現状である。一年間の中で最大規模の学校行事である文化祭が間近に迫ってくるので、次なる準備に移ることになる。

文化祭における最大の「試練」は、クラスの出し物と部活の演技発表との両立である。また、夏のコンクールで数名の3年生が引退して2年生がバンドの全権を握り、自分たちで全ての運営をしなくてはならないことも大変なことの１つである。だからといって「部活があるからクラスの出し物は協力できません」と言ってしまうと、クラスメートから非難を浴びるし、クラスの出し物ばかりに熱中しすぎると演奏がままならない。まさに「試練」。そこで、この時期は「部活以外の時間の使い方」と「切り替え」が非常に重要となる。授業中はしっかりと勉強に集中し、放課後はクラス準備と練習をバランスよく取り組む。そして、それ以外の時間を使い個々人でどれくらい準備ができるか、という部分で「人間力」が問われるのが文化祭という行事である。

② それぞれの文化祭の「向き合い方」

多くの生徒は最初、勉強・部活動・クラス準備、どこかの分野を言い訳に逃げてしまうことが多い。クラスの学芸委員（文化祭のクラスの発表を仕切るリーダー）になっている生徒はクラスをまとめるアイディアを考えなくてはならないし、部活も限られた時間内で良いステージ

みねぎしゆうすけ : 国語科

を作らなくてはならないし、学校の授業も待ってはくれないので、逃げたくなる気持ちはよくわかる。ただ、そういう状況に悩んでいる生徒を見たら、自分はミーティングや生徒との話を通して「どう自分と向き合うのか」ということを伝えていくのが顧問陣の役目だと考えている。もちろん、この時期は顧問も自分の担任するクラスの準備や文化祭の準備のための会議等もあり生徒と同じような状況であるので、部活に十分に時間を割くことができないが、時間を捻出する姿勢を見せて生徒に伝えていくことも重要なのだと、日々の活動を通して痛感する毎日であった。

③ 充実の一日

そしていよいよ文化祭当日を迎える。本校の文化祭は2日間開催となっており、吹奏楽部は2日間とも校庭と講堂の2ヵ所、計4回の発表がある。午前中はクラスの出し物の仕事をして、午後からは校庭演奏、講堂演奏と発表が続く。

まず、校庭の発表は約20分で2～3曲を演奏するが、ただ演奏するのではなく、体系移動や振り付けのパフォーマンスをしながら演奏する。時間も曲数も講堂内での演奏に比べてはるかに短いが、厳しい残暑が残る季節にパフォーマンスをしながら演奏するのは想像以上に疲れるものである。しかし、この過酷な状況の中で「いかに笑顔で、音楽の楽しさを全身で伝えられるか」ということを意識しながら、全力で演奏する生徒たちの姿はとても生き生きしていて、見る人聞く人の心に訴えかけるものがあった。生徒たちはこの校庭演奏を通して、過酷な状況でも生き生きと演奏をして観客に感動を伝える「パフォーマーとしての姿勢」を学んだようである。

そして、校庭での演奏が終わると今度は講堂での演奏に移る。本校の講堂は本校舎から少し離れた場所にあるため、校庭の演奏が終わってから楽器を移動させるのだが、この楽器運搬もなかなかの体力仕事であるため、ここでも体力を奪われてしまう。そして、講堂の演技発表の前にすでにへとへとになってしまうのである。

このような疲労困憊状態で、講堂での演技発表は始まる。講堂内での演技発表は約50分間で、この当時は全てポップスの曲を演奏しており、パフォーマンスも全曲で行っていたのでかなり体力勝負となる。しかし、聞きに来てくれるお客様にはそんなことは関係なく、とにかく「良い演奏」を期待する。このことは生徒にとって一番実感しづらいことで、生徒たちはどうしても「時間がない」や「好きなパフォーマンスをやりたい」などの「自分の都合」を主張しがちになってしまう。この時、「お客様目線」での演奏やパフォーマンスを意識させる声掛けをするのだが、これがなかなか難しい。なぜなら、生徒はどうしても「自分の意見・人格を否定された」と受け取ってしまうからである。大人は「冷静に」指摘しているつもりでも生徒は「感情的に」捉えるので、パフォーマンス（振り付け）のダメ出しをすると「先生やコーチには毎回自分たちの意見を採用してくれない」と言ってふてくされてしまう。だからこそ、声掛けの工夫をしたり根気強く声かけをしたりするなど、生徒ごとの個別の対応が求められ、試行

錯誤する日々だった。

生徒も顧問・コーチも試行錯誤する中で迎えた文化祭のステージは熱いものだった。練習時間が少ない中で重要となることは「本番の集中力」で、当日のバタバタの中でどれくらい集中できるかが勝負となるが、やはり「本番に強いな」という印象だった。もちろん、細かい部分の改善点はたくさんあるが、普段うまくいかない部分は本番の集中力で乗り越えていき、顧問の先生方と「うちの生徒は本番に強いかもね」という話をしていたほどである。演奏を終えてお客様からの拍手をもらう中で、もっと多くの人に聞いてもらう機会を作ってあげたいと思えた瞬間でもあった。

この文化祭では様々な衝突や挫折もあったと思うが、「お客様視点」と「パフォーマーとしての姿勢」の2つを学んだようである。ただ、当日の勢いと集中力で乗り切ったという面もあるので、当日の集中力に頼らない確かな演奏技術・完成度の高いパフォーマンスを習得するため、日頃からの練習メニューの見直しが今後の課題として残った。

Ⅱ.秋の充電期間

① 基礎の重要性

9月に開催された文化祭でパフォーマーとしての経験を積んだ生徒たちであったが、それと同時に浮き彫りになった課題は、前項の通り「基礎的な音楽技術」であった。9月の下旬に行われる文化祭が終わるとすぐに定期考査があるが、それが終わると次の大きな本番は5月の定期演奏会になってしまうので、半年近く間があくことになる。この期間を我々は「秋の充電期間」と位置付けている。この充電期間である7ヵ月をいかに有意義に使うかで、翌年の5月の定期演奏会、ひいては8月のコンクールの演奏が大きく変わってくる。勉強との両立を考慮して部活動の時間がそれほど多くない本校では、基礎を一から確認できるこの時期はとても重要な期間だったのである。

② 中だるみの時期

しかし、重要だとわかっていても、本番が近づかないとなかなかスイッチが入らないのが人間の性というもので、本校の部員も例にもれず「中だるみの時期」を過ごしてしまう。練習風景を見ても、夏のコンクールや文化祭の繁忙期と比べてどことなく身が入っていないように見えるし、合奏をやっても練習時間に見合った成果は見られなかった。

こうなることは顧問もわかっているし、部活動を仕切っているリーダーたちもわかってはいるものの、部員全員にこの時期の重要性を理解させて本番直前の緊張感を持たせるのは至難の業。リーダーたちと協力をして、パート練習を見回ったり、ミーティングで色々な声掛けをしたりすることで部員の意識向上を図るが、なかなかうまくいかない。また、新しい本番を増やすために部員内のソロコンテストやアンサンブルコンテストを企画したが、譜面を選ぶ段階で「どの曲を選べばよいのか」「譜面のお金はどうするのか」といったハード面の課題が山積し

て、企画は頓挫してしまった。

そこで、次の大きな舞台である定期演奏会までの具体的なシミュレーションをし、各係の仕事を明確にすることで危機意識とモチベーションの向上を図ることにした。

③ 定期演奏会へ

まず、昨年度の定期演奏会で露呈した課題が山積していたので、その課題を資料にまとめてリーダーたちと共有し、各係の仕事内容を明確化させた。当時の幹部たち（部長＋副部長2名＋学生指揮者）はこちらの意図を良く理解してくれていて、「選曲の締め切り」や「いつまでにどの曲を完成させるか」「いつ全体の合わせの練習をするか」といった「To doリスト」をカレンダーに書き込んで可視化し、仕事内容を明確にさせていった。これはなかなかできることではなく、社会人になって仕事をする上でもとても大切なことで、今後の準備に向けて期待感が高まった出来事であった。これにより、少なくともリーダーたちのモチベーションは上がり、部の雰囲気も前向きになっていった。しかし、目標は明確になったものの、やはり「どのパートも練習の意図を考えて、効率的に練習する」という大きな課題は解決されずにダラダラと練習する様子が見受けられ、「大人数の部活で演奏技術の底上げは並大抵のことではないのだ」と再確認させられた出来事であった。

Ⅲ.アンサンブルコンテスト

① アンサンブルコンテストのメンバー選考

文化祭が終わり、充電期間もしばらく経った頃に頭を悩ませる問題は、1月5・6日に開催される「アンサンブルコンテスト」のメンバー選考である。この大会は、毎年年始に行われる吹奏楽連盟主催の公式のコンテストで、夏に行われる50人規模のコンクールとは異なり、3名以上8名以内で組まれる少人数での演奏を競う大会である。また、各学校で出場できるチーム数が2チーム（最大16名）と決まっているため、60名以上部員がいる吹奏楽部ではかなりの人数が落選することになる。そのため、メンバー選考は毎年頭を悩ませる問題となっていた。

そうは言っても、誰も選ばないわけにはいかないので選考していくのだが、最初の悩みは「編成」である。このアンサンブルは編成が多岐にわたり、「金管」「木管」「打楽器」の3つの部門と、3～8人の人数を決めていかなくてはならない。部活動なので「やりたい人が出る」というスタイルでも良いかもしれないが、本校の部活の代表として出演することになるので「賞を狙っていく」という姿勢も大事になる。そこで顧問で話し合い、この時は大まかに「成長できるベストメンバー」「普段部活の音楽活動の中心になっている功労者」という観点で選考したら良いのではないか、という話で終えた。

まず、「普段部活の音楽活動の中心になっている功労者」という観点だが、これは普段から合奏などで積極的に演奏しているのにも関わらず、大人数の演奏になると目立たない楽器などがあるので、そういう部員にも活躍の場を与えたいという思いは以前から抱いていたので、こ

ういう観点が良いのではないかという話になった。また、「ベストメンバー」という観点だが、やはりコンテストという趣旨で演奏する限り、本部活の代表を決める必要がある。そのため、本当は選びたい部員も「楽器の編成」が上手くいかず、断腸の思いで別の部員を選ぶこともある。また、近年は「八重奏」などの大人数の編成が強いこともあり、大人数の編成も視野に入れた。

これらのことをふまえて、最終的に「金管八重奏」と「サクソフォーン四重奏」の2チームを選び、エントリーすることになった。

② チームワーク

本校吹奏楽部の代表チームが決定し、部員にメンバーと編成を発表してからやることは「選曲」（いわゆる勝負曲を決めること）である。編成は伝えているので、部員たちにどの曲が良いか調べさせ、その上で顧問と相談して最終に決める。金管のチームはホルンが1人だけの編成が多かったが、日頃の練習の姿勢を見てもう1人を出場させたいと思い、ホルンが2人の編成を選んだ。そのため、曲も限られていたので比較的すんなり曲が決まり、「2つの詩曲」（作曲：松下倫士）という曲を選んだ。一方のサクソフォーンチームは、時代の流れに逆行して少人数のチーム編成にしたので、サクソフォーンカルテット（四重奏のこと）の古典的な名曲・難曲で挑んでいこうという話しでまとまり、悩みながらも「グラーヴェとプレスト」（作曲：リヴィエ）という有名曲に決めた。

そうして曲も決め、エントリーも済んだところで「さぁ練習するぞ！」となるはずなのだが、10月の上旬からは2学期の中間考査が始まる時期で、練習が一時中断してしまう。また、試験明けからも「定期演奏会に向けての練習」をやりながら時間を見つけて練習する形になっているので、なかなか1つに集中して練習するのも難しい。なぜなら、アンサンブルコンテストに出演するメンバーはおよそ各パートのリーダーであることが多いので、パートの練習などの日頃の練習と並行してやらなくてはならないからである。

こういった大変な状況の中、一番大事になってくるのは「チームワーク」である。これは私の私見だが、アンサンブルは普段やっている大人数の編成よりもより一層個人の責任が重くなるため、どれほど仲間を信頼して思い切って演奏できるかが鍵になると考えている。そのため、「馴れ合い」という意味のチームワークではなく、「お互いに本気で意見をぶつけ合える関係性」という意味のチームワークが大切だと思う。高校生の年代になると、相手との関係を考えるようになって本音で相手にぶつかっていく機会も減ってしまうし、「腹を割って話をする関係」まで至らずに引退してしまう部員も多くいるように感じている。本校の部員たちも例に漏れず、チームワークの部分で苦労していた。代表チームといっても個人の力量に差があるので、リーダー達がレベルの高い厳しい要求をすれば当然ついていけない部員も出てくる。その「熱量の差」はどの時代のどの年代も感じている難しさなのかもしれない。

このような困難を感じながら、アンサンブルの練習に集中できる年末の時期になった。本校

では年末年始の活動は通常12月28日まで、年始は1月6日から部活動ができるが、アンサンブルの本番が1月5・6日なので、年末年始は特別練習の届を出して12月30日までと1月4日から練習させてもらっている。この年末年始はアンサンブルコンテストに出る部員だけが練習をする日で、その他の部員は休養日となっている。そのため、この時期がアンサンブルコンテストのためだけの練習期間となる。短い練習期間ではあるが、部員たちの成長をもっとも感じることのできる数日間でもある。

我々顧問もこの部員たちに全力で向き合うことができる期間でもあるので、しばらく金管チームとサクソフォーンチームを見ていたが、あることに気づく。それは、練習を重ねるにつれて部員の「基礎技術が気になってくる」ということである。普通は練習を重ねるごとに「表現面」の注意が増えてくるはずである。しかし、「ここの表現が気になるのはなぜだろう」と考えていると、「音色が固いのかな」「指がうまく回っていないのかな」などの「基礎技術」が原因なのではないかと思うようになった。そこで、サクソフォーンチームはスケール（ドレミファソラシド、といった音が階段状になっている「音階」というもの。楽器の基礎技術を身に着ける練習で扱うことが多い。）の練習、金管チームはテンポや和音の練習といった基礎的な練習を毎日取り組むようにアドバイスをした。そうすると、少しずつではあるが、音楽の表現にも幅が出てくるようになってきた。この時に、「短期間でこれだけ成長できるポテンシャルがあるのだから、日頃の練習からコツコツ地道な基礎練習が必要なんだな」と当たり前なことを再確認したのであった。

それと同時に、「熱量の差」も感じてしまった。もちろん部員個人で成長のスピードは違うものだが、チームが伸び悩んでいるのは「何を目指すか」という目標がチーム内で共有できていないことによるものであると感じた。そのため、各チームで「都大会につながる金賞を目指す」とか「まずは金賞をとることを目指す」等の「共通意識」を持つようにアドバイスした。そうすると意外とお互い思っていることが違っていることが明らかになる。ある部員は自分に自信が持てずに「とりあえず金賞」と言っているし、ある部員は「絶対に都大会に行く！」と言っている状態になっており、これでは「一体感のある演奏」はできない。そこで、「お互いに本気で意見をぶつけ合える関係性」という意味のチームワークの話をして、年末に考えて各チームで話し合ってみるよう促し、年末最後の練習を終えた。

③ 本番と結果

お正月が明け、直前の練習日を迎える。この最初の練習で部員たちに驚かされることになる。年末の練習より良くなっているのである。もちろん数日の間で練習はできるかもしれないが、年末年始はどうしてもだらけてしまうもの。だからこそ、驚きを隠せなかった。1・2日でアドバイスできることは限られているが、気づいたことを伝えていく。金管チームはコーチに音楽面のアドバイスを最後まで受け、限界まで表現しようと必死になっていた。サクソフォーンチームは確かな技術と豊かな表現を目指し、最後まで必死になっていた。

そして、本番当日。金管チームは1月5日、サクソフォーンチームは1月6日だったので、金管チームが一足先に本番を迎えた。金管チームは順調に練習を進めていたように見えたが、やはり本番という場は魔物がいるようで、演奏開始直後に普段絶対に外さない音をミスしてしまう。普通ならそこで動揺してその後の演奏も崩れてしまうものだが、そこで吹っ切れたのか、その後の演奏は持ち直して攻めた演奏をすることができていたように感じる。本番直後はどの部員の最初のミスに動揺したと話していたが、ミスをした部員が「むしろ吹っ切れました(笑)」という話を聞いて、部員たちの成長をしみじみと実感していた。東京都高等学校吹奏楽連盟主催の吹奏楽のコンテストは、大会が複数日にまたがっていても、各日にちで結果発表が行われる。結果は、「ゴールド金賞！」。部員たちは「えっ？やった！」という驚きと喜びの混じった歓声を上げ、喜びを爆発させていた。

そして、翌1月6日のサクソフォーンチームも本番を迎える。こちらのチームは、前半と後半で曲調ががらりと変わる構成の曲を演奏していたので、前半のバラート箇所は「遅くなりすぎず、美しく表現する」こと、後半の速いテンポの箇所は「正確な運指と、テンポをキープする」ことを最後まで確認していた。こちらのチームは4人の編成であったこともあり、ダイナミックで繊細な美しい音楽が求められているということは部員もわかっていたので、移動の電車でも運指の練習やイメージトレーニングをしていた。こんな姿は今まで見たことがなかったので、これだけでも部員たちの成長をしみじみと感じることができた。そして、緊張しながらも大きな事故もなく演奏を終えた。結果は「銀賞」。年末年始を返上して練習をしていたので悔しそうな表情をしていたが、やり切った充実感も感じたようで、部員も顧問もこの大会の意義を感じることができた。

どちらのチームも短い時間の中で工夫をしながらよく頑張っていたと思う。その上で「都大会進出の壁の厚さ」を実感し、日頃の地道な練習を積み重ねることで得られる「説得力のある演奏」の必要性を痛感した瞬間でもあった。

Ⅳ. 定期演奏会

①「単独」ライブ

アンサンブルコンテストも終え、本部活の集大成の演奏会である定期演奏会に向けて全員での練習が再開する。これは私の私見だが、定期演奏会をやる上で一番意識しなければならないことは「単独ライブである」ということだ。昨今、日本では中学校・高等学校での吹奏楽の人気が高まり、定期演奏会を外部施設（音楽ホール等）で行う学校が増え、「定期演奏会」というものが一般的になりつつある。しかし、大学のビックバンドサークル（サックスやトランペット等のブラス楽器と、ドラムやベースなどのリズム楽器20名ほどでジャズの曲を演奏する。吹奏楽のジャズバージョンのようなイメージ。）でたった3枚ほどのチケットノルマも達成できなかった経験から、「自分たちの演奏のためだけに来てもらう」ということは本当に大変なことであるし、「生演奏を聴きに来てもらうことのハードルの高さ」を痛感した。その経験を

踏まえ、自分たちの演奏を「ホール」でやることがどれほど恵まれているのか、「単独ライブ」に多くの方が足を運んでくれるようにするのがどれほど大変なのか、ということを部員たちが意識できるような声掛けを心掛けた。

しかし、身内で行うコンサートのイメージが強い部員が多く、「3年生の引退公演」のような選曲・構成を考えていたので、それだと多くの人に足を運んでもらえないことを説明し、「本校吹奏楽部の単独ライブにいかに興味を持ってもらうか」ということ「来てくださったお客様がいかに楽しんでもらうか」ということを強く意識するよう諭した。頭ではわかっていながらも実感するのは経験した後であることが多いので、部員たちに「実感」させることの難しさを再確認した瞬間であった。

② コンセプト決めとステージ構成

定期演奏会が当たり前のものでなく、「いかに自分たちの強みや魅力を見てもらうか」ということを意識させたので、その後は具体的な「ステージ構成」を考えていく。ステージ構成と言っても本当に多岐にわたっているので、まずは他の学校がどのような取り組みをしているか調べてみてはどうかと提案し、他校調査から始まった。そうすると、「このパフォーマンスがかっこいい！」とか「この曲やってみたい！」といったアイディアが徐々に出てきたので、それらを集約して「演奏会のコンセプト」を決めることになった。部員達には「演奏者は演奏会の最後にどのような気持ちになっていたいか、お客様は演奏会の最後にどういう気持ちになってもらいたいか」を考えるようアドバイスすると、この年はちょうど本校の演奏会が40回目を迎える節目の年であったことに気づく。そして、部員たちと相談して「お客様も演奏者もこの40年を振り返ることのでき、特別感のある演奏会」というコンセプトに決めた。そして部員やコーチ・顧問で話し合い、1月上旬に最終的に以下のステージ構成に決めた。

1部：クラシカルステージ
2部：コーチとの共演ステージ
3部：「ザ・ベストテン」（久米宏と黒柳徹子が司会を務め、一世を風靡した番組）風ステージ

③ 選曲の難しさ

演奏会のコンセプトもステージ構成も決まったので、演奏会の曲を決めていく段階になった。

まず、1部の曲選びの段階で起こったのは「フェスバリ事件」。この「フェスバリ」とは吹奏楽の名曲である「フェスティバル・バリエーション」の略称であり、吹奏楽界隈では難曲として有名であった。この時お世話になっていたコーチと顧問で話し合っている時に、「フェスバリやるか！」となり、コーチが部員たちに「フェスバリやるぞ！」と切り出し、部員一同驚愕。「それは難しい！」「無理です！」と非難の嵐が起こり、プチ事件となってしまった。確かに難曲ではあるが、全く歯が立たない曲でもなく部員たちの成長を感じていたからこその提案

であったので、決して迷走したわけではない。何より、コーチも顧問も「名曲に触れさせてあげたい」という思いが強かったので根気強く部員を説得し、部員たちも諦めてやることに決めた。ただ、ここで部員たちが偉かったのは、すぐに切り替えたことである。「やるとなったら全力でやる！」という姿勢が部活全体に広がり、逞しさを感じることができた瞬間であった。この事件をきっかけに、アンドリュー・ロイド・ウェバーが作曲した「オペラ座の怪人」のメドレーや、オーケストラで有名なR.ワーグナーの「ローエングリン」より「エルザの大聖堂への行列」というバラード調の曲など、名曲にチャレンジすることとなった。

そして、2部は普段お世話になっている3名のコーチ（トロンボーン、ユーフォニアム、トランペットのコーチ）にバンドとのソロ演奏をお願いし、快諾していただいた。そして、最後に3名のコーチ全員とバンド全員でフランキー・ヴァリの「Can't Take My Eyes Off You（君の瞳に恋してる）」を演奏させていただくことを提案し、こちらも快諾していただき、部員たちも大喜びであった。

最後に頭を悩ませたのは、3部の「ザ・ベストテン」風ステージ。久米宏と黒柳徹子が司会を務め、最強視聴率は40%以上をたたき出した名番組を参考にするところまでは良かったが、どの曲を取り上げるかで頭を悩ませた。本校吹奏楽部が初めて定期演奏会を実施した40年前から10年ずつベストテン形式で紹介し、1位の曲を吹奏楽で演奏するという形式はすぐに決まった。しかし、その10年間ごとのランキングの1位があまり記憶にない曲であったり、譜面がなかったりするトラブルが起こり、どの曲を演奏するかを決めるのに苦労した。また、ただ演奏しても面白くないので、最近の曲はダンスを入れられないか、どういう演奏の工夫ができるか、そんなことも考えながら徐々に選曲を進めていった。そして、以下の曲を中心に演奏を組み立てることに決めた。

1985年のベストテン：1位 チェッカーズ「ジュリアに傷心」
1995年のベストテン：1位 DEAMS COME TRUE「LOVE LOVE LOVE」
2005年のベストテン：1位 修二と彰「青春アミーゴ」
この当時を代表する曲のメドレー：
「J-BEST'14～2014年J-POPベストヒッツスペシャルメドレー～」
（希望的リフレイン（AKB48）、ようかい体操第一＜妖怪ウォッチ＞、Dragon Night（SEKAI NO OWARI）、GUTS!（嵐）など）

④ 経験したことのない曲数と焦り

ようやく構成・曲も決まり「いざ練習するぞ」という段階になったが、気づいてみれば練習しなければならない新曲の山。本校の吹奏楽部が行う本番は、夏のコンクール2曲、文化祭7曲程度、アンサンブルコンテスト1曲、と演奏曲数が10曲に満たない本番ばかりなので、定期演奏会で演奏する20近い曲は未知の経験となる。そのため、どの曲から練習すれば良いのか、どれくらい練習すれば合奏で自信をもって演奏できるのか、といった不安や焦りばかりが先行

してしまう。そこで、リーダーたちはどの時期にどの曲を完成させていくかというシミュレーションをして、短期目標と長期目標を部員に伝えた上で、我々顧問の暇を見つけては「合奏お願いします！」と頼みにきた。これには純粋に「よく考えているな」と感心した。このリーダーたちの取り組みによって部員たちの練習にメリハリがつき、学業も懸命に取り組みながら、難曲・大曲の完成にメドがつくくらいまで成長してきた。

⑤ 部員の「仕事」

冬も佳境に差し掛かった2月、普段の練習にも熱が入り始めて順調に進んでいくと誰もが思っていた時期。こういう時ほど用心しなくてはならないのだと再確認させられたのが、「部員たちの仕事」の問題である。これは、「部員たちの仕事」がそれぞれ忙しくなり、練習に出られない部員が増えてきたことによって部活の一体感が失われて重苦しい雰囲気になってしまった、という問題である。

定期演奏会は先に述べたように「単独ライブ」であるので、コンクールと違って演奏会に関わる全ての仕事を全て自分たちでやらなければならない。その仕事は大きく分けて2つあり、「演奏会前にやる仕事」と「演奏会当日にやる仕事」である。「演奏会前にやる仕事」には「チラシ・パンフレットの作成」「他校への電話連絡や宣伝回り」「OBOGや出身中学校へのチラシの郵送」などがあり、「演奏会当日にやる仕事」には「演奏会の進行表」「当日に手伝ってくれるOBOGへの連絡」「舞台の衣装・装飾などの道具作成」「音響・照明のプラン表の作成」などがある。これらの仕事を部員全員が分担して取り組むのだが、各仕事で忙しい時期が異なっている上に、それぞれの仕事がマニュアル化されておらず、0から自分たちで考えなくてはならない状況であった。この状況では、どんなに優秀な高校生でも楽器の練習ができずに「仕事をこなす」だけで終わってしまう。

そこで、各仕事をデータ化・マニュアル化させつつも「各係のリーダーが仕事の進捗を把握し、リーダー同士でその情報を共有」するよう指示し、家でやれるものは家で行って、学校では家でできない「楽器の練習」に時間を割くようアドバイスをした。ただ、そうはいっても、家では学校の授業の予習・復習や課題が待ち構えている部員も多く、部活との両立は困難を極めていたので、すぐに改善されるわけでもなく、手探り状態が続いた。しかし、このような困難な状況が続いても、本番が近づいて仕事が進むにつれて少しずつ部活の雰囲気が良くなり、練習にも再び熱が入り始めたところで、3月の学年末考査を迎えることになった。（この時はなぜ雰囲気が良くなってきたのかとても不思議だったのだが、本番が終わった後に振り返ってみると、これは「集大成である定期演奏会にかける想い」が高まってきたからなのではないかと感じた。）

⑥ 春合宿

学年末考査を終え、いよいよ定期演奏会まで2ヵ月を切った。この時期は、勉強はもちろん

だが普段よりも落ち着いて部活動に打ち込める時期なので、特に毎年3月末に行っている春合宿で各ステージを完成させることが目標となる。

この時の春合宿は夏合宿より1日短い3泊4日で、秩父にある「いこいの村ヘリテイジ美の山」という場所で行った。この場所では、広い宴会場を合奏場として使い、個人の部屋をパート練習の場所として使った。ただ、この合宿は「各ステージのパフォーマンスや構成を完成させる」ということを目的としていたので、練習の大半が合奏形式で行われた。

そして、練習が始まってみると、部員たちの顔がみるみるうちにやつれていく。原因は、疲労と不安。普段授業がある日の部活動は長くても2時間半程度で、休日でも多くて3時間半程度の練習時間なので、午前2時間＋午後4時間＋夜2時間の練習を終えるとさすがの高校生もヘロヘロ状態。その上、合奏をやればやるほど課題が見えてくるため、「このペースで本番まで間に合うのだろうか…」という不安にも苛まれてしまう。

このようにやつれきった部員を毎日見ることになるのだが、それでも「春合宿をやって良かった」と感じる瞬間が何回か訪れる。まず1つ目は、「広い場所でじっくりと練習できる」という環境である。本校の音楽室は60名以上の部員が一同に会して練習するには手狭な環境で、楽器運搬が大変なことから講堂での練習もそれほど多くはできない。したがって、ホールに近い広い場所でじっくりと練習できるのは、定期演奏会前は春合宿くらいしかないのである。そのような状況なので、毎年この春合宿は「企画ステージ」（今回であれば3部の「ベストテン」風ステージのこと。2年生を中心に個性が最大限活かされるような企画ステージを毎年考えている。）の流れやパフォーマンスをなんとか完成させようと練習し、ステージの形がこの合宿でできあがっていく（広さがない音楽室でもできる演奏主体の1部は学校に戻ってから集中的に練習することにしていた）。この時間や場所というものは何物にも代えがたく、本番をシミュレーションすることでステージの全体像を把握できるようになるので、合宿の意義が感じられる瞬間であった。

2つ目は、「部員たちのコミュニケーションを深めることができる」ことである。自分の母校の音楽部は合宿の礼儀に「和の形成」というものをあげており、いわゆるチーム作りの機会として有効だと考えている。本校の吹奏楽部では、授業がある日は17時半ギリギリまで練習して18時に下校するため、腹を割ったコミュニケーションがなかなかできない。そのため、じっくりと腰を据えて部員と話す機会をより多く得ることができるのが、この春合宿である。夜寝る時間が少し遅くなって寝不足気味だとしても、部員同士の壁が少しでも低くなって信頼関係を築き、「一緒に音楽を作っていく仲間」となる良い機会としてとても有意義な時間であったと感じることができた。

このような意義と疲労を部員・顧問・コーチ皆で感じつつ、徐々に3部ステージの骨格とパフォーマンスが出来上がってくる。そして、達成感と課題を感じつつ、3泊4日の春合宿を大きな事故なく無事に終えることができ、ほっと胸をなでおろした。

⑦ 学校生活との両立の難しさ

春合宿を無事に終えると次は新学期が始まる。4月は新学期に慣れ、新入生の仮入部、定期演奏会の練習・準備などがあり、とにかく忙しい。吹奏楽部の大きな本番である、夏のコンクールも冬のアンサンブルコンテストも長期休み中の実施なので、部活の演奏だけに集中できるのだが、定期演奏会だけはそういうわけにもいかない。

部員たちはまず、新しいクラスや新しく始まる授業などに慣れるところから始まる。どの年齢になっても「新しい環境」というものは緊張するし、それだけで気疲れしてしまうが、切り替えてやるしかない。そして、もう一つの難題は自分たちの練習・仕事をやりながら、しっかりと新入生を勧誘しなくてはならないことだ。これでは新3年生が倒れてしまうので、来年度の試運転期間として部活勧誘と仮入部は新2年生が担当することにさせ、定期演奏会の準備が忙しい新3年生は自分たちの練習や仕事を優先させることにして分担させた。そして、一番の勧誘は定期演奏会に来てもらって「この部活に入りたい！」と思ってもらうことだとアドバイスをし、本番へのモチベーションにつなげることを意識した。それでも練習時間が足りないので、新入生が下校する17時から17時半なで毎日合奏をして練習時間を補うことにした。30分の合奏で「いかに切り替えて練習に集中できるか」「明確な目的意識を持てるか」ということが試され、鍛えられていったように感じる。そんなバタバタ状態でゴールデンウィークの本番を迎えることになる。

⑧ いざ、本番

日々の雑多な生活を乗り越え、いよいよ本番当日を迎える。今回の定期演奏会は、仕事をデータ化・マニュアル化し、OBOGの力も最大限借りて当日の心配事を少しでも減らすことで、部員たちが演奏に集中できる環境を作ることを意識した。そうは言っても、全てをカバーすることはできないので、当然トラブルが多発した。

まず、1つめの大きなトラブルはプロジェクターの問題。今回、3部のベストテン風ステージで「ランキング」をプロジェクターで投影させ、それを見ながらステージを進行させる構成を考えていた。そのため、映像の投影は必須事項だったのだが、プロジェクターを利用したのが初めてであり、ホールのスタッフさんにも「そんなことをやる人はいなかったのでどうしましょうね…」と言われてしまい、朝から大ピンチ。ただ、諦めるわけにもいかないので、色々な場所に置いて巨大スクリーンの位置に当てはめていく。そうしてもがいていると、コーチやホールのスタッフさんも「この人たちは面白い事しているな」と思っていただけたようで、徐々に声をかけていただき、手伝っていただけた。舞台・客席など様々な場所を試してようやく客席中央の場所でうまく投影することができ、コーチとがっちりと握手を交わした。不思議なもので、一生懸命やっている人の回りに人は集まってくるものなのだな、と感じた瞬間であった。

そうして大きなトラブルを乗り越えたが、次は時間のトラブルである。演奏会の開演時間は

絶対にずらすことができないのだが、大幅に3部のベストテン風ステージのリハーサルが押してしまい、その後のリハーサルが短くなってしまった。どこでリハーサルを切るか、どのように時間を再配分するか、その判断を迫られることになった。ステージの時間管理は「ステージマネージャー」という役職の人が担当することになっており、OBOGが担当してくれる。しかし、OBOGも演奏会の「手伝い」は始めてなので、ステージマネージャーと指揮者と相談しながら進めていくが、部員に不安を抱かせないようにする時間設定はなかなか難しい。そういう手探り状態でリハーサルを進めていくことになった。

そして、最後のトラブルは「部員の体力」の問題。ホールでの練習は当日の朝から夕方までの5時間程度しかないので全力で集中して取り組むのだが、5時間のペース配分は経験したことがないので吹きすぎてしまう。そうすると、午後になると徐々に体力が落ち、ミスが増えてくる。「吹きすぎるな！」と言っても、本番に向けてのアドレナリンが大量に出ているので、それも難しい。こればっかりは「経験」が必要なのだと感じ、あとは部員たちの「本番に強いポテンシャル」に掛けることにした。

このような数々のトラブルを乗り越え、ついに開演のベルが鳴る。照明が明るくなり、緊張と凛々しさの混じる表情で舞台に入場し、思い切りのある演奏をして1部のクラシカルステージを無事に終えることができた。それぞれのソロ演奏も良く吹いていたと思う。そして、2部のコーチとの共演ステージは部員たちも楽しみにしていたステージで、コーチの先生たちの「本気の演奏」を舞台で体感することができたようで、本当に楽しそうに生き生きと演奏して、熱気冷めやらぬままに演奏を終えた。そして、最後の3部ベストテン風ステージを迎える。OBOGによる映像の投影操作、部員の中から選ばれた司会の進行も、部員たちの演奏も大きなトラブルなく進み、「パフォーマー」としての雰囲気が徐々に漂っていくのが感じられた。聞いていただいたお客様に「懐かしい曲から現在の曲まで楽しむことができた！」と言っていただき、充実したステーで集大成である定期演奏会を終えることができた。普段から「ラストノート（演奏会の最後に演奏する音）で感動できるくらいまでやり切ろう！」と言っていたので、最後の曲で涙を流していた部員がいたのを知り、とても充実感を感じることができた。

⑨ 得たものと課題

第40回の記念演奏会は、「安定感」と「部員の自力」が見えた本番になったと思う。部員たちの仕事を整理して体系化し、事前に準備できることが格段に増えたと感じている。また、部員・顧問・コーチ・OBOGの全ての人が「國學院高校吹奏楽部」の一員となり、演奏会を作ってくださったと痛感できる本番になったと強く感じている。そして、部員の「本番時のポテンシャルの高さ」にまたしても驚かされることとなった。「1年の集大成」と位置付けた演奏会としてふさわしいものになったのではないか。

ただ、次の演奏会に向けてより良くするための課題も見えた。「今回の体系化した仕事をいかに引き継ぐか」、「今年以上の企画をする」、「リハーサルのペース配分」、「より多くの人に聞

いてもらうための宣伝」など、多くの課題も見えたが、来年度に活かしていってもらいたい。

3. 2019年度現在での吹奏楽部の活動報告

① 体育祭、野球応援、オープンスクール、コンクール

私が本校に赴任してから6年が過ぎ、吹奏楽部も徐々に変わっている。代替わりの体育祭では、「星条旗よ永遠なれ」の行進曲演奏と、リレーの際のトランペットのファンファーレは引き続き行われており、新体制の船出の場として定着している。夏の野球応援は球場の関係で演奏できなかった年もあったが、神宮第二球場での試合の時は3年生も含めて100名近くで応援させていただいている。また新しいイベントとしては、夏に「オープンスクール」という部活動を中心に本校を紹介するイベントもでき、そこでも演奏させていただいている。夏のコンクールは、6年間の中で2回金賞まであと一歩のところまできたが、他校がどんどん上手になっており、金賞の壁の高さは年々感じている。

② 文化祭、アンサンブルコンテスト、新人戦、定期演奏会

夏明けの文化祭は、2年生の修学旅行が文化祭前になったことで以前よりも準備が大変になっている。しかし、文化祭でクラシックを演奏するなど、お客様に楽しんでもらうために色々なチャレンジをしている。年明けにあるアンサンブルコンテストは、希望者を募ってオーディションをする形になった。その代わり、5年前に始まった「東京都吹奏楽コンクール新人戦」という1・2年生のみが参加するコンクールに出場し、年末年始の中だるみの時期に新たな目標を設定し、そこでの金賞受賞に向けて練習している。そして、集大成である定期演奏会では、ここ3年でミュージカルに挑戦している。演奏会の運営についても、保護者の方々が3年前に後援会を立ち上げていただいたことで、部員・顧問・保護者・コーチ・OBOGの「オール國學院」で作り上げる舞台になりつつある。今後も「國學院高校吹奏楽部らしさあふれる、お客様のためのステージ」を目指して、日々戦っていきたい。

4. 終わりに

この外苑春秋の原稿作成を通じて、色々な人に支えられ、色々な経験をさせていただいたことを、改めて実感することができた。部員・顧問・保護者・コーチ・卒業生、音楽で通じることができた全ての「縁」を大切にし、新しい部員たちに伝えていきたいと思う。

部活動のガイドラインができた今、短時間でいかに効率的に練習できるかが問われてくるように感じている。また、部活動の経験が勉強に活かされ、勉強が部活動に活かされるサイクルを作っていき、「素敵で本物の音楽」をより多くの人に体験してもらいたいと願っている。このような機会をいただいた全ての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

吹奏楽部の２年間を通じて（下）（p81～94）　　峯岸　優介

文化祭の校庭演奏の様子①

文化祭の校庭演奏の様子②

野球応援の様子

定期演奏会での演奏風景